

【原 著】

全学日本語コースレベル設定と ACTFL-OPI

森岡 明美 坂野 永理 内丸 裕佳子

Reevaluating the Seven Levels of the Japanese Language Classes Based on the ACTFL-OPI

Akemi MORIOKA, Eri BANNO, Yukako UCHIMARU

2014

岡山大学教師教育開発センター紀要 第4号 別冊

Reprinted from Bulletin of Center for Teacher Education  
and Development, Okayama University, Vol.4, March 2014

原 著

## 全学日本語コースレベル設定と ACTFL-OPI

森岡 明美\*<sup>1</sup> 坂野 永理\*<sup>1</sup> 内丸 裕佳子\*<sup>1</sup>

岡山大学言語教育センターの全学日本語コースでは、初級から上級まで7レベルのクラスを提供しているが、このレベル設定の妥当性を検討するには外部基準に照らすことが適当と考え、そのひとつとして、ACTFL (American Council for Teaching of Foreign Languages) の OPI (Oral Proficiency Interview) を行った。ACTFL-OPI は様々な言語の「話す能力」測定法として確立され活用されているインタビュー方式の試験であり、ACTFL に認定されたテスターによってなされる。本稿では、全学日本語コース履修生を対象に行った ACTFL-OPI の実施方法及び結果を報告し、全学日本語コースの各レベルと ACTFL-OPI の対応について述べる。

キーワード : ACTFL, OPI, レベル設定

※1 岡山大学言語教育センター

## I. はじめに

岡山大学には 2013 年 5 月 1 日現在、465 名の留学生が在籍している。留学生は大学院生、学部生、研究生などさまざまな身分で在籍しているが、彼らのうち、学部の正規生を除いた留学生を対象として開講されているのが言語教育センターによって提供されている全学日本語コースである。本コースは留学生の多様な日本語レベルやニーズに対応するため、初級から上級までを 7 レベルに分け、各レベルで週当たり 6～8 コマの授業を提供している (内丸他, 2013)。

岡山大学においては、近年交換留学などの短期留学生 (特別聴講学生) が増加の傾向にある。彼らが岡山大学で履修した日本語科目の単位は、母国の大学の単位として認定が行われる場合も多い。この際、交換留学の相手機関の担当者や留学生から、全学日本語コースの各レベルがどのぐらいの日本語の能力にあたるかを示す客観的な指標の有無について問い合わせを受けることがある。日本語能力を示す標準テストとしては、日本語能力試験があり、これ以外にも CEFR (ヨーロッパ共通言語参照枠)、ACTFL 言語運用能力ガイドラインなどが世界的に認知されている外国語能力指標として挙げられる。これらの指標が全学日本語コースのどのレベルに対応するかがわかれば、それに相当するレベルの母国の大学の日

本語科目への単位の振替が容易になる。それと共に、岡山大学に留学を考えている留学生や彼らが所属する大学の関係者にも全学日本語コースのレベルがよりわかりやすく提示できるようになる。

上記の点をふまえ、言語教育センター日本語系では、全学日本語コースの各レベルと ACTFL 言語運用能力ガイドラインのレベルとの対応表を作成し、同コースの日本語のレベルをわかりやすく提示するための調査を実施することとした。調査では、2011 年度と 2012 年度に全学日本語コース履修者を対象にして、ACTFL 言語運用能力ガイドラインに沿った口頭能力テストである ACTFL-OPI を課した。本稿は、ACTFL-OPI についての説明と共に、今回行った調査の実施方法、テスト結果、そして ACTFL-OPI のレベルと全学日本語コースの各レベルとの対応について述べるものである。

## II. ACTFL-OPI とは

ACTFL は、The American Council on the Teaching of Foreign Languages (全米外国語教育協会) の略称で、小学校から大学院、会社など全てのレベルや機関における全ての外国語教育を考え、その改良や普及を目的とする組織である。ACTFL 言語運用能力ガイドラインとは、外国語の「話す」「書く」「聞

く「読む」の4技能各々について、個人ができることをレベル別に記述したものである。1986年に公開されたが、その後数回修正が行われ、現在は2012年版が公開されている（ACTFL, 2012a）

ACTFL-OPIのOPIは、Oral Proficiency Interview（口頭能力インタビュー）の略称で、ACTFLが開発した外国語の口頭運用能力を測定するための対面式インタビュー試験である。訓練された専門テスターが質問やロールプレイなどを含む15～30分程度のインタビューを行い、そこで得られた発話サンプルをACTFL言語運用能力ガイドラインに照らし合わせ能力を判定する。

判定されるレベルは、従来、図1に示されるように、初級・中級・上級・超級の四つに大別されていたが、2012年の言語運用ガイドラインの改訂により、これに卓越級が加わり、現在は五つのレベルに分けられている。初級から上級まではそれぞれ「上・中・下」の三つのサブレベルに分けられおり、全部で11のレベルからなる（ACTFL, 2012b）。

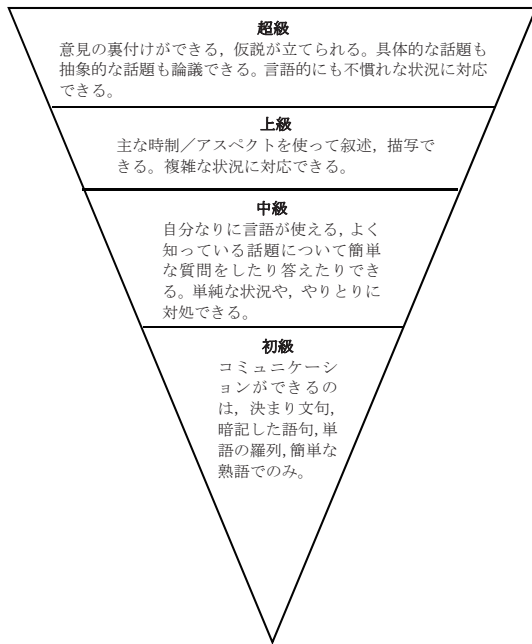


図1 ACTFL 判定尺度の主要レベル (牧野他, 2001)

受験者の発話サンプル（パフォーマンス）の判定は、(1) 機能／総合的なタスク遂行能力, (2) 社会的場面／話題領域, (3) 談話の型, (4) 正確さの4つの観点から解釈される。(1)から(3)についてのそれぞれのレベルの判定基準は表1の通りである。

表1 レベル別判定基準

	機能／総合的なタスク遂行能力	社会的場面／話題領域	談話の型
超級	裏付けのある意見が述べられる。仮説が立てられる。	フォーマル・インフォーマルな状況で、抽象的な話題・専門的な話題を幅広くこなせる。	複段落
上級	詳しい説明・叙述ができる。	インフォーマルな状況で具体的な話題がこなせる。	段落
中級	意味のある陳述・質問内容を模倣ではなくて創造できる。	日常的な場面で身近な日常的な話題が話せる。	文
初級	暗記した語句を使って最低の伝達等の極めて限られた内容が話せる。	非常に身近な場面において挨拶を行う。	語・句

(牧野他, 2001)

(4)の「正確さ」は、「文法」「語彙」「発音」「社会言語学的能力」「語用論的能力」「流暢さ」の6つの要素からなる。正確さのレベル別の判定基準は表2, 3の通りである。

表2 正確さのレベル別判定基準1

	文法	語彙	発音
超級	基本構文に間違いがまずない。低頻度構文には間違いがあるが伝達に支障は起きない。	語彙が豊富。特に漢語系の抽象語彙が駆使できる。	誰が聞いてもわかる。母語の痕跡がほとんどない。
上級	談話文法を使って統括された段落が作れる。	漢語系の抽象語彙の部分的コントロールができる。	外国人の日本語に慣れていない人にもわかるが、母語の影響が残っている。
中級	高頻度の構文がかなりコントロールされている。	具体的で身近な基礎語彙が使える。	外国人の日本語に慣れている人にはわかる。
初級	語・句のレベルだから文法は事実上ないに等しい。	わずかの丸暗記した基礎語彙や挨拶言葉が使える。	母語の影響が強く、外国人の日本語に慣れている人にもわかりにくい。

(牧野他, 2001)

表3 正確さのレベル別判定基準2

	社会言語学的能力	語用論的能力	流暢さ
超級	くだけた表現もかしこまった敬語もできる。	ターンテイキング, 重要な情報のハイライトの仕方, 間の取り方, あいづちなどが巧みにできる。	会話全体が滑らか

上級	主なスピーチレベルが使える。敬語は部分的コントロールだけ。	相づち、言い換えができる。	ときどきつかえることはあるが、一人でどんだん話せる。
中級	常体か敬体のどちらかが駆使できる。	相づち、言い換えに成功するのはまれ。	つかえることが多いし、一人で話しつづけることは難しい。
初級	暗記した待遇表現だけができる	語用論的能力はゼロ。	流暢さはない。

(牧野他, 2001)

ACTFL-OPI (以下 OPI) は、文法の正確さなどに限らず、社会言語学的能力に必要な文化知識や語用運用能力として示されているコミュニケーション・ストラテジーをも測定基準に入れ、多面的な角度から言語運用能力を測ろうと試みている。

インタビューは、テストと被験者が一対一で 15 分～ 30 分行う。導入部分では、あいさつや軽い話から始め、その後ロールプレイを 2 回程行い、最後にインタビュー全体をおさめる会話を行って終結する。導入部分で被験者のレベルが初級だと判明すれば、ロールプレイを行う必要はないため、15 分程度でインタビューは終了するが、どのレベルであっても最長 30 分を超えてはいけない。テストは、ACTFL が作成した中級、上級、超級のロールプレイのタスクが書いてあるロールプレイカードセットを準備し、導入部分で被験者のレベルがどの級にあたるかを判定した後、使用するカードを決める。最初のロールプレイでは被験者の能力の最低ラインを定め、次のロールプレイで能力の最高ラインを見つけ、最終的なレベルを判定するのが通常の過程である。

インタビューはすべて録音され、テストは終了後に録音を聞き直し、ガイドラインに照らしながら、被験者の口頭運用能力がどのレベルにあるかを判定していく。

### Ⅲ. 岡山大学で実施した OPI について

#### 1 調査時期・対象・方法

岡山大学言語教育センター日本語系では、2012 年 2 月と 7 月の 2 度に分けて OPI を使用した調査を行った。OPI の受験は、ACTFL に申請すれば行うことができる。この場合、2 名のテストが採点し、正式な認定証が発行されることとなる。今回の調査は時期、および費用面を考慮し、ACTFL の認定を受けたテスト 1 名に依頼し、岡山大学内において OPI を

行うこととした。OPI 実施後、学生 1 名につき A 4 サイズ 1 枚に OPI の判定レベルと詳細なコメントをまとめた電子ファイルがテストから送付され、各学生には担当教員から同ファイルが渡された。

#### 【調査実施時期と調査対象】

第 1 回目 (2012 年 2 月 6 日～ 9 日) 23 名

初級 2 10 名

中国 4 名, アメリカ 2 名, ベトナム 1 名,  
タイ 1 名, オーストラリア 1 名,  
イギリス 1 名

中級入門 9 名

中国 1 名, アメリカ 4 名, フランス 3 名,  
ドイツ 1 名

中級 1 4 名

中国 3 名, アメリカ 1 名

第 2 回目 (2012 年 7 月 23 日～ 26 日) 26 名

中級 1 12 名

中国 3 名, アメリカ 4 名, ベトナム 1 名,  
フランス 3 名, ドイツ 1 名

中級 2 10 名

中国 4 名, アメリカ 3 名, フランス 2 名,  
韓国 1 名

上級 1 4 名

韓国 3 名, トルコ 1 名

いずれの調査も学期末に行った。第 1 回目の調査では、「初級 2」と「中級入門」の学生は全員、「中級 1」は希望者のみが OPI を受けた。「初級 2」のみ OPI の結果が期末評価に含まれている。第 2 回目の調査では、「中級 1」の学生は当日 1 名の欠席を除き全員が受験、「中級 2」も全員、「上級 1」は希望者のみが受験した。OPI の結果は期末評価に含まれていない。時間的制約により「初級 1」と「上級 2」クラスの OPI は実施できなかった。

#### 【調査方法】

学生 1 名あたり 45 分の調査時間を設けた。インタビュー試験を 20 分～ 30 分実施し、IC レコーダーに録音した。残り時間はテストによる調整及びデータ整理に充てた。テストの負担を考慮し、実施人数は 1 日最大 8 名とした。

第 1 回目の調査日と人数

2012 年 2 月 6 日 5 名  
2012 年 2 月 7 日 8 名  
2012 年 2 月 8 日 5 名  
2012 年 2 月 9 日 5 名

第2回目の調査日と人数

2012年7月23日	4名
2012年7月24日	6名
2012年7月25日	8名
2012年7月26日	8名

2 調査結果

表4はOPIの判定結果を履修科目ごとに人数でまとめたものであり、図2から図6は各クラスにおけるOPIのレベル判定結果の割合をまとめたものである。

表4 履修科目ごとのOPIレベル別人数

履修科目名 (受験者数)	中級			上級	
	下	中	上	下	中
初級2 (10名)	4	6			
中級入門 (9名)	2	3	3	1	
中級1 (16名)		11	4	1	
中級2 (10名)		5	5		
上級1 (4名)			1	1	2

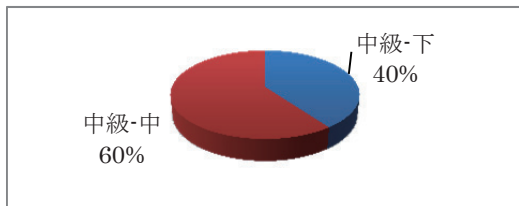


図2 OPIレベル (初級2)

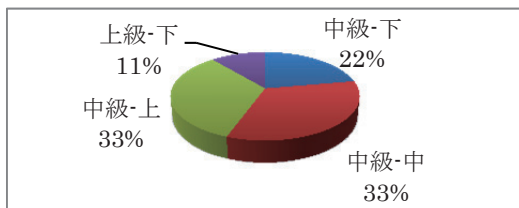


図3 OPIレベル (中級入門)

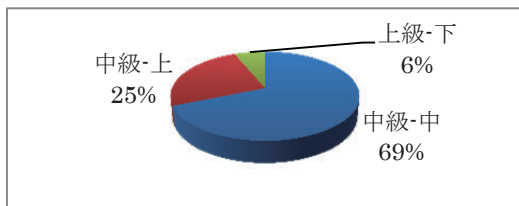


図4 OPIレベル (中級1)

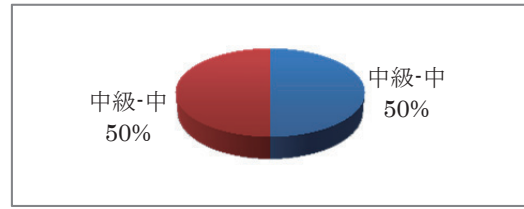


図5 OPIレベル (中級2)

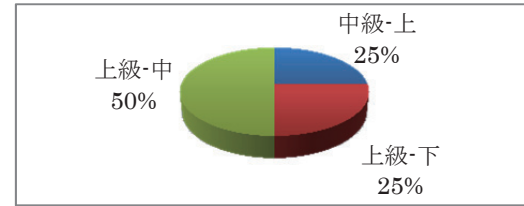


図6 OPIレベル (上級1)

全学日本語コースの「初級2」クラス履修生は全員が「中級-下」または「中級-中」と判定された。際立った結果は、「中級1」クラス履修生の分布がOPIの「中級-中」に集中していることである。その他4クラスの履修生のレベルが分散しているのに対し、顕著な違いが見られる。

第1回目、第2回目の調査を2011年度後期、2012年度前期に行ったことから、2回連続してインタビュー試験を受けた学生が11名いた。学生11名のOPIの判定結果は以下のとおりである。

【OPIの判定結果が向上した学生】4名

- 中級-下 → 中級-中 2名  
(中級入門から中級1へ進級2名)
- 中級-中 → 中級-上 2名  
(中級1から中級2へ進級2名)

【OPIの判定結果に変化なし】7名

- 中級-中 → 中級-中 3名  
(中級入門から中級1へ進級2名、中級1から中級2へ進級1名)
- 中級-上 → 中級-上 3名  
(中級入門から中級1へ進級2名、中級入門から中級2へ進級1名)
- 上級-下 → 上級-下 1名  
(中級入門から中級1へ進級1名)

第1回目の調査で「中級-下」と判定された学生は、第2回目の調査で結果が上がっている。一方、「中級-中」以上のレベルでは、判定結果が向上した学生は2名で、他は変化が見られなかった。



### 3 全学日本語コースと OPI との対応

第一章で述べたように、今回の調査の目的は、全学日本語コースの各レベルと ACTFL 言語運用能力ガイドラインのレベルとの対応表を作成し、コースの日本語のレベルをわかりやすく提示することにある。今回の調査で得られた OPI の結果を基に、全学日本語コースの各レベルを修了した場合、OPI のどのレベルにあたるかの対応表の作成を試みた。

表 4 からは、日本語のレベルが上がるにつれ、OPI のレベルも上がる傾向があることがわかる。しかしながら、各レベルの学生の OPI のレベルにはばらつきがあることも見て取れる。ばらつきの原因の一つとしては、コースに初めて参加する履修者に行うクラス分けの試験に話すテストはなく、聴解・文法テストであることが挙げられる。履修者のレベル決定には話す能力は考慮されないため、話す能力が上の者が上のレベルに振り分けられているとは限らない。また、授業は「読む・書く・聞く・話す」の四技能の総合的な育成を目指すクラスであり、話す力を伸ばすことのみを目的としてはいない。一般的に日本語の授業では、上のレベルに行くにつれ、読解が多くなる傾向がある。このため、話す練習に重点が置かれず、履修者の話す能力があまり伸びないということも考えられる。

今回の調査結果を基に全学日本語コースの各科目の終了時点のレベルと OPI のレベルとの対応を表 5 のように設定した。「初級 2」については、「中級-中」と判定された者も多かったが、「初級 2」というレベルも考慮し、授業終了時点でのレベルは「中級-下」が妥当と判断した。「中級入門」の受験者は「中級-下」から「上級-下」までばらつきが大きかったが、中級の下レベルであることを考え、「中級-下~中」とした。「中級 1」は最も多くの受験者が判定されたレベルの「中級-中」とした。「中級 2」についても受験者の判定されたレベルである「中級-中~上」とし、「上級 1」については、「上級-下~中」とした。ただし、「上級 1」は受験者数が少ないため、今後受験者を増やして確認する必要があると考える。今回設定したレベル対応は、一つの目安である。このため、学生によりある程度のレベルのばらつきが生じるのは想定されることであり、問題ではないと思われる。なお、全学日本語コースは 2013 年 4 月に大幅な改編を行い、科目名も変更された。表の左は現在の科目名、その右が旧科目名である。

表 5 全学日本語コースと OPI との対応

科目名	旧科目名	OPI レベル
日本語 2	初級 2	中級-下
日本語 3	中級入門	中級-下~中
日本語 4	中級 1	中級-中
日本語 5	中級 2	中級-中~上
日本語 6	上級 1	上級-下~中

### IV. おわりに

本調査では、ACTFL 言語運用能力ガイドラインに沿ったインタビュー試験である OPI を実施し、その結果を基に全学日本語コースのクラスの終了時点でのレベルとの対応表を作成した。

今回の調査ではサンプル数が少なかったことが問題点の一つとして挙げられる。課題としては、それぞれのレベルの受験者を増やして調査を継続する必要がある。また、今回調査できなかった「日本語 1 (旧初級 1)」と「日本語 7 (旧上級 2)」の履修者への調査も実施し、「初級 1」から「上級 2」までの全 7 レベルとの対応表を作成することも必要である。

今後は、ある程度のデータを集めて、対応表の見直しを行った後、対応表を公開していく予定である。これにより、岡山大学全学日本語コースの各クラスのレベルが岡山大学に留学する学生やその関係者にわかりやすく提示でき、交換留学をする者にとっては、学生の所属する大学の日本語クラスとの連携や日本語科目の単位認定などへの一助となると考える。

参考文献：

ACTFL (2012a). ACTFL Proficiency Guidelines 2012, <http://www.actfl.org/publications/guidelines-and-manuals/actfl-proficiency-guidelines-2012> (2013 年 12 月 26 日閲覧)

ACTFL (2012b). Oral Proficiency Interview Familiarization Manual 2012, <http://www.languagetesting.com/wp-content/uploads/2012/07/OPI.FamiliarizationManual.pdf> (2013 年 12 月 26 日閲覧)

牧野誠一・鎌田修・山内博之・齋藤眞理子・荻原稚佳子・伊藤とく美・池崎美代子・中島和子 (2001) 『ACTFL-OPI 入門—日本語学習者の「話す力」を客観的に測る—』アルク

内丸裕佳子・坂野永理・森岡明美 (2013) 「岡山大学全学日本語コースのカリキュラム改編について」『大学教育研究紀要』第 9 号, pp.79-88.

i 学部の正規留学生を対象とした日本語科目は、  
教養教育の外国語科目として開講されている。

---

Reevaluating the Seven Levels of the Japanese Language Classes Based on the ACTFL-OPI  
Akemi MORIOKA\*1 Eri BANNO\*1 Yukako UCHIMARU \*1

Abstract

The Japanese Language Course at Okayama University offers 7 levels of classes from Beginner to Advanced. In order to confirm the appropriateness of these 7 levels, they were compared to the levels of the ACTFL-OPI (Oral Proficiency Interview of the American Council for the Teaching of Foreign Languages). The ACTFL-OPI is a speaking test, which entails an interview by a certified tester. This is a report of the procedure and results of the OPI, which was conducted on the students who were enrolled in our Japanese Language Program.

Keywords: ACTFL, OPI, achievement goals

\*1 Language Education Center

---